祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報　第86号

てんまてんじん

大阪天満宮
1125
菅原道真公
御神退1125年
式年大祭

地車講「舁きだんじり」を新調……3頁
御文庫講「文車」改修……4頁
本社、中門、透塀、表大門
　大阪市有形文化財に指定……6頁
天満の天神さんと私（7）
　にじのとり保育園……7頁
境外の天満宮・天神祭（六）
住吉神社の能舞台……7頁
新刊『大阪天満宮と天神祭』……10頁
千代崎行宮の造営……11頁

表紙解説

「天神像・随身像」

大阪天満宮所蔵　紙本版画
縦六八・八㎝　横二一・二㎝
歌川芳虎画　明治時代　一舗

松浦　清（大阪工業大学教授）

扁額に「天満宮」と記す社殿の内陣に天神を、高欄を巡らす階の下に随身と狛犬を配する錦絵です。錦絵とは多色摺りの木版画を指す用語です。様々な大きさの和紙が用紙となり、小奉書（約三三㎝×四七㎝）を半分に裁断した間判を縦に二枚繋いだものかと思われます。

天神を単独で描く軸装形式の絵画作品は、現存する作品を見る限り、十三世紀に遡る遺品はなく、室町時代から江戸時代を通して各種の天神像が制作されました。本図のように随身と狛犬を伴う作品は、江戸時代中後期から明治時代にかけて量産されるようです。

本図の天神は笏を執り太刀を佩用する束帯姿で、黒の袍の文様は星梅鉢とし、松竹梅を配する後屏を背にして繧繝縁（内側に小紋高麗縁）の上畳に坐す表現です。頭上の御簾と幔幕は引き上げられ、尊顔を斜めから拝する構図となっています。

随身は階の下に左右二体が向き合うように配されています。冠には耳の前に緌をかけ、弓矢を帯同して虎皮の敷物に片足を踏み下げて着座しています。その姿は随身の役割をよく示す表現といえるでしょう。

そもそも随身とは、貴人の外出時に警護のため随従した武官のことで、神社の神門の左右に門衛として配される像も随身像（随神像とも）と呼ばれます。随身像の古例には平安時代に制作された木像がありますが、次第に表現の形式化が進むと、向かって右を阿形（開口）、左を吽形（閉口）とし、老若を区別するなど、江戸時代には本図のような表現が確立します。

随身の背中越しに矢羽が扇状に開いて見えるのは、矢を収容する容器である胡籙の形状が平胡籙であることを示すものです。容器が筒状の壺胡籙は実践的で見かけが美しくないためか、絵画作品では儀仗用の装飾性が好まれるようです。

随身像の前には「奉納」の文字と星梅鉢を置く台座上に、狛犬を左右一対で配しています。狛犬は神社の聖域を守護する霊獣で、歴史的には二系統に分類されます。それは唐代に請来された古い系統と、宋代に請来された系統です。

前者は宮中の調度として御簾や几帳の煽り止めに用いた鎮子が前身とされます。獅子・狛犬一対で表現され、社殿の守護獣として宗教的儀礼空間へ取り込まれました。形式化が進み、獅子は阿形で社殿に向かって右側に配され、狛犬は吽形で社殿に向かって左側に配されるようになります。奈良・薬師寺の木像（平安時代後期）はその形式を伝え、また、滋賀・御上神社の木像（平安時代後期）のように、狛犬の頭頂には一角を表現するのが一般的になります。

後者は奈良・東大寺南大門北面の石像（鎌倉時代）や、京都・由岐神社の石像（鎌倉時代）の系統で、宋の石工の作風を伝えると考えられるものです。由岐神社の石像は阿形が児獅子を、吽形が領巾を結ぶ鞠を前足で支え、身をくねらせるような動きのある作風が特徴です。この形式は普通、唐獅子と呼ばれます。

これら前者・後者の系統のいずれも本来は獅子が祖型であり、狛犬は高麗から請来された外来獣との意味で、獅子と狛犬の名称の違いに本質的な差異はありません。

本図では社殿に向かって右側を阿形、左側を吽形としますが、阿形の頭頂に一角があり、吽形の頭頂に宝珠状のものを載せています。戸外の石造の表現とみられますが、体勢に動きがなく、唐風が和様化した江戸時代らしい表現です。

江戸時代の中後期に活躍した絵師の北尾重政や鳥居清長に、天神像の掛軸に各種のバリエーションがあったことを示す見本一覧のような短冊判墨摺絵があります。それらを見ると、社殿内陣に天神を、社殿の階の下に随身や狛犬を配する作例があるため、十八世紀には本図のような構図が成立するとみられます。

画面下部には絵師の名「孟斎芳虎筆」が記されています。これは江戸時代末期から明治期に活躍した歌川芳虎で、「孟斎」はその号です。署名の下の「通油町藤慶版」は日本橋通油町の版元・藤岡屋慶次郎を示しています。その右の印影は錦絵出版にかかる検閲の改印です。《干支・月・「改」》を用いた時期のもので、「巳四改」と判読され、明治二年（一八六九）四月のものとみられます。

地車講「舁きだんじり」を新調

江戸時代の天神祭には町々から数多くの地車（だんじり）が出て、最盛期には八十四輌もの地車が登場していましたが、時代の変遷とともに輌数は減少し、現在は、地車講（じくるまこう）が曳行する三ツ屋根地車一輌だけとなっています。

その地車講が、この度「舁（か）きだんじり」を新調されました。その名の通り、舁く地車です（車も付いており曳くこともできます）。

新調奉告祭・祝賀パーティー

去る七月六日、リーガロイヤルホテル大阪において、「舁きだんじり」の新調奉告祭が斎行されるとともに、祝賀パーティーが開催されました。

パーティーに来賓として出席した寺井種治宮司は、「この『舁きだんじり』によって、今年の天神祭に華を添えていただけることを、大変嬉しく思っております」と祝辞を述べました。

パーティーの後半では、出席の講員たちによって、初舁きが行われ、皆様にその雄姿が披露されました。

新調のきっかけ

「舁きだんじり」の新調について、地車講総代の河部宏之さんにお聞きしました。

――　地車と言えば曳くものだと思いますが、なぜ舁くことになったんでしょう？

河部　きっかけは、一昨年の七月二十三日でした。帝国ホテル大阪で、地車囃子や龍踊りを披露した帰り、天神橋筋商店街を曳行したのですが、環状線天満駅から北へも行きたいという声が出たのに、道幅が狭くなっていて行けませんねん。そこで、私が『担ぐことができたらどこへでも行けるんちゃうか』と言うてしもたんですわ。

――　地車講は、二年前に三ツ屋根地車を新調されたばかりです（本誌83号）。続いての新調は大変だったのでは？

河部　そうでんな。前の三ツ屋根が四千五百万円、こんどの舁きが八百万円、だいぶ借金しました。けど、これも天神祭のことやからね。皆さん喜んでくれてはるしね。

来年に向けて

――　今年の天神祭は支障なく舁けましたか。また、来年への展望は？

河部　初めてでしたけど、うまくいきましたね。ただ、三ツ屋根地車の宮入り時に境内の都合で、舁きだんじりは表門前の仮置き場に止めざるを得なかったんです。来年は何か工夫して、三ツ屋根と舁きの二輌で宮入りしたいでんな。変化なくして、進化なしです。

祝賀パーティーで初披露された「舁きだんじり」

天満市場前の「三ツ屋根地車」と「舁きだんじり」

大阪書林御文庫講「文車」改修

「文車（ふくるま）」は、日本の古代から中世にかけて使用されていた書物や古文書を保管・運搬するための特別な車です。貴族や寺院を中心に重要な文化財の保管や移動に使用され、木製の車輪付きの構造で、美しい装飾が施されたものも多かったと言われています。文車には、棚が設けられており、必要な書物を収納できるよう工夫されていました。また、屋根が付いているものもあり、書物を雨や風から守る役割も果たしていました。

中世において、文車は蔵書や古文書の保管場所が不足する状況を補うためにも使用されました。蔵書の多くは文庫に保管されていましたが、日常的に使用する書物や儀式に必要な文書は、文車に収納し、邸宅内で保管・移動が行われました。譲渡の際には、文車ごと蔵書が相続されるケースもあり、重要な財産としての側面も持っていました。

大阪天満宮に所蔵されている文車は、大阪書林御文庫講によって昭和の初期に復元され、三十年前の修繕を経て、本年二度目の大規模修繕を行いました。屋形付きの豪華な車で、溜塗りという美しい漆塗りで仕上げています。天神祭の陸渡御では御祭神の菅原道真公が道中で読まれる書物を運ぶ大事な役割を担ってきました。享保十五年（一七三〇）の「天満宮御文庫講」を結成して以来、御文庫講の加盟各社は初摺り本（初版）を天満宮に奉納し、社業と家族の御加護を祈念してきました。今後も、三百年近い年月を経てきた歴史と伝統を、文車の保存・活用とともに引き継いでいく所存です。

御文庫講　矢部敬一

大阪書林御文庫講300年・「文車」修理完成御祓式（令和6年7月20日）

御迎え人形スタンプラリー ホテルニューオータニ大阪に 羽柴秀吉が初登場

江戸中期、天満宮の御旅所周辺の住民たちは、天神祭本宮の日に大川上流から下航してくる船渡御をお迎えするために「御迎え船」を仕立てました。その船上に飾られた豪華絢爛の人形が「御迎え人形」です。

天神祭月間である七月中、当宮では御迎え人形スタンプラリーを開催してきました。大阪市内各所（当宮・帝国ホテル大阪・大阪アメニティパーク・大阪くらしの今昔館・花外楼北浜本店）に御迎え人形を設置し、専用のスタンプシートを使って各所を巡っていただく催し物です。

そして、本年度よりホテルニューオータニ大阪様も企画に御賛同いただき、初めて御迎え人形を飾っていただいたのです。大阪城のお膝元ということもあり、羽柴秀吉の御迎え人形を設置することはホテルの長年の夢であったようです。また今回、桜ノ宮橋の下流側には、橋吊提灯でのご協賛もしていただきました。

御迎え人形は、現存する十六体が大阪府の有形民俗文化財に指定されております。一年ごとに入れ替わりで御迎え人形を設置しておりますので、是非スタンプラリーの完成を目指してご参加いただければ幸いでございます。（広報企画室　仲　真矢）

御迎え人形「羽柴秀吉」
旧所蔵町：木津川町、大江卯兵衛の作

桜ノ宮橋下流側の橋吊提灯

広報室だより①
天神祭クラウドファンディング

今年の天神祭では五年振りにクラウドファンディングを行いました。以前の反省を踏まえ、今回は外部の方々の協力の元実施いたしました。

主催いただいたのは『なにわ文化サポーター倶楽部』。学生の有志による『天神祭関西学生プロジェクトチーム』を結成し実施いただきました。寺井宮司にインタビュー動画を依頼、SNSを駆使し、事前告知も精力的に行いました。

また返礼品で使用する手拭いと扇子のデザインコンテストも専門学校の学生達を対象に実施し、表彰式はテレビ大阪の取材も受けました。

当初の目標金額は百万円で、募集期間は一ヵ月余り。スタートダッシュが上手くいったお陰で期間途中に目標金額を達成。しかしプロジェクトメンバーはこれで満足せず、更に上を目指し「ネクストゴール」の目標金額二百万円に設定。そして見事に最終二百十一万二千五百円でクリアしました（因みに支援者数は百八十五人）。ここから経費を引いた分が当宮に奉納され、天神祭の会計に組み込まれ、警備費や諸々の赤字解消に役立たせていただきます。

全体定例会議の様子

職員では思いつかない返礼品のアイディアや、学生ならではの素早い行動力のお陰で大きな目標を達成出来たのでしょう。厚くお礼を申し上げます。

【返礼品（一部）】

勾玉（ガラス製）のキーホルダー。

クリスタル花火（ガラス製・LED発光体）。

ガラスの盾と墨汁のセット。

以上三点は、当宮御神水舎作家の岡本覚様とのコラボ作品です。

令和六年 浪速菅廟吟社詠草

雪稜　松村暁二撰

四月課題　清明小旅

未醒　梅津　史子　京都市

堤柳揺風人喜晴　踏青漫歩一襟清
落花半落藻春水　蹴鞠鞦韆染笑聲

《訓読》堤柳風に揺らぎて人は晴れを喜び、青を踏みて漫ろに歩せば一襟清し、落花半落春水を藻り、蹴鞠鞦韆笑声に染まる

《通釈》堤の柳は青めき揺れるを人々は喜び、草を踏んで散策する人の心は清らかである。桜の花は半ば散り流れる水をくぐり、毬をけりブランコに笑い声がひびく。

五月課題　山徑聞鵑

鵬城　北野　修司　大阪市

白雲遠去餞春華　苔徑紅深謝豹花
杜宇一聲望帝恨　八千里外破青霞

《訓読》白雲遠く去って春華に餞し、苔徑紅は深し謝豹の花、杜宇一声望帝の恨み、八千里外青霞を破る

《通釈》白雲さりゆき初夏を迎える。苔の道はツツジのはなで紅い。ホトトギスの鳴き声は、望帝の後悔の涙か、その鳴き声は遠いところまで響くのであろう。

六月課題　梅天即事

笙麗　坂井田礼子　松本市

蕭然小院午寒侵　窗暗模糊連日霖
只聽鳴蛙檐溜下　幾時不住鬱陶心

《訓読》蕭然たる小院午寒侵し、窓は暗く模糊として連日の霖、ただ鳴蛙を聴く檐溜の下、幾時かやまず鬱陶の心

《通釈》ものさびしげな、院に昼間にも寒さが入り込み、窓は暗くぼんやりと毎日雨が降る。聞こえて来るのは元気な蛙の鳴き声。何時迄もとどまることなき鬱陶しい気持ちなのです。

七月課題　離島周遊

盡誠堂　麓　直浩　岡山県

辭岸舟遊蒼海晴　徐廻離島水清澄
風涼過午孤微睡　半夢遙聞鷗一聲

《訓読》岸を辞して舟遊すれば蒼海晴る、徐に離島を廻れば水清澄、風涼し過午孤り微睡す、半夢遥かに聞く鴎一声

《通釈》岸を離れて舟に遊べば海は青く晴れ、ゆっくりと離島を巡る海は清く澄んでいる。風は涼しき午後、ひとりうたた寝をする。夢のようなぼんやりした耳に鴎のこえが聞こえてきた。

○小舟にて小島巡りつ海風に微睡む中の鴎一声

大阪天満宮の大阪市有形文化財（建築）指定について

大阪市文化財保護審議会会長
大阪市立大学名誉教授
谷　直樹

令和五年度の大阪市有形文化財（建築）に、大阪天満宮の本殿・幣殿および拝殿（以下、本社とする）一棟、中門一棟、透塀二棟、表大門一棟が指定されました。

大阪天満宮は、江戸時代の記録に残るだけでも七度の火災に遭い、その都度復興されてきました。現在の建物は、天保八年（一八三七）二月の大塩平八郎の乱による焼失後に再建されたものです。本社は同十一年（一八四〇）に釿始、同十四年五月に上棟、表大門は同十五年五月に上棟し、弘化二年（一八四五）四月十三日に正遷宮が執り行われました。その後、明治十一年（一八七八）には透塀の彫物が、同三十二年から三十四年にかけて屋根の葺替えが、大正十三年（一九二四）には拝殿の格天井が完成しており、およそ二十五年毎に行われる正遷宮に合わせて、建物の維持管理とともに細部の荘厳が充実されていきました。

今回、指定に関連した調査による、拝殿の屋根裏から墨書のある板が見つかりました。そこには「三殿屋根仕前覚」と題して本社の屋根工事の奉納者名が列挙され、末尾に「天保拾四年卯十二月八日 奉納 今井町治兵衛、棟梁彦兵衛」とあり、造営にかかわった今井町（現在の天満一丁目）の治兵衛と棟梁の名を知ることができました。

天満宮といえば京都の北野天満宮が良く知られています。北野天満宮の建物は、本殿と拝殿を相の間で連結し、屋根がエの字形に連なる複合社殿で、古く平安時代に成立しました。近世になって豊臣秀吉を祀る豊国廟や徳川家康を祀る東照宮など大規模な神社建築に採用され、やがて家康の神号である東照大権現の名から「権現造」と呼ばれるようになりました。大阪天満宮も本殿と拝殿との間を幣殿でつないだ権現造の形式をとっています。本殿は正面の柱間が五間あって、「五間社」と呼ばれる府下には類例のない大型の建物です。また柱上の組物、蟇股、木鼻、透塀の欄間などの優れた意匠、複雑な屋根を破綻なく処理した高い技術も、この建物の見どころになっています。なお現在の屋根葺材は銅板ですが、当初は檜皮でした。

戦災に遭った大阪市内にあって、焼失を免れた著名な神社建築は、住吉大社と大阪天満宮です。住吉大社御本殿（四棟）の住吉造は、神明造（伊勢神宮）や大社造（出雲大社）とともに神社建築の最古の様式とされ、国宝に指定されています。

一方、大阪天満宮の本殿・幣殿・拝殿は大阪における権現造の最大規模の建築に位置づけることができます。今回、大阪天満宮の建物が大阪市有形文化財に指定されたことで、大阪市の北と南の著名な神社建築がそろって文化財として長く保存されることになりました。それは文化財保護にとどまらず、大阪の歴史や都市景観にとっても大きな意義をもっています。

屋根がまだ檜皮葺時代の本社（大正期頃か）

本殿内を調査される谷直樹先生

天満の天神さんと私（7）

にじのとり保育園

園長　秋山 智賀子

二〇一一年三月十一日。東北地方を大きな揺れが襲い、未曾有の事態となった日、私の心にこれまでなかった大きなうねりが起こり、ずっと心の中で思い続けながらも言い訳ばかりを繰り返して実行に移せなかった事を始めるために、勤めていた職場に退職届を出して、えいや！と動き始めました。ともすれば腐ってしまうのではないかと言う程に思いを募らせていたのは、『心育む保育園をつくる』という大それた事でした。私がそんな事を話すと多くの大人は鼻で笑い、できるもんかと直接的にも間接的にも否定されました。

ですが、若い頃から私は集団の中では変わっていると言われ続け、もはや否定の言葉は褒め言葉として私に降り注いでくれました。否定されればされるほど絶対出来ると強く思えたのは幸いでした。程なくして有り難い事に多くのご縁に恵まれ、あまり土地勘のない北区紅梅町に最高の場所が用意されており、晴れて保育園を開園する運びとなりました。

保育園の場所が決まってから向かった先は天満宮さんでした。そこで私は保育園を開園のご報告と、これまで全ての出会いと経験、お導きへの感謝をお伝えしました。その後まだまだ内装ができただけの保育園に戻った翌日に、一人目の入園児さんがやってきた事は今も脳裏から離れません。それから先は予想もしてなかった程、できたばかりの小さな認可外保育園の扉をノックしてくださるご家庭が増え、その日から早十三年目を迎える事ができました。

今も昔も変わらず天神さんの境内で安心して、はしゃぐオレンジ色をした子どもたちを追いかけながら明るく笑う職員の姿は生涯私の誇りであり宝物です。これからも私はこの場所で、ここに集まる皆と共に私を生かしていきます。いつもお導きとお見守りを有り難うございます。

境外の天満宮・天神祭（六）

豊中市住吉神社の能舞台

今回は、かつては天満宮境内にあったことが知られる豊中市服部南町の住吉神社の能舞台をご紹介します。天満宮では江戸時代より寄進能や勧進能が奉納されましたが、随時特設の舞台が設けられていたようです。境内に能舞台が常設されるのは、「大阪博物場」の能舞台（明治三十一年（一八九八）建築）が移築された時で、昭和三年（一九二八）三月二十四日に落成奏上祭ならびに清祓式が行われました。当日は早朝午前四時に清祓式が斎行され、六時からは「翁」の神舞の段が開始。ちょうどその時朝日の金色の光が射し鏡板の影向の松も翁も神々しく輝いたと伝えられています。折しも昭和三年は菅原道真公御神退一〇二五年大祭の式年に当たり、能舞台でも連日勧進能が奉納されました。（本誌41号、昭和三年社報46号の記事より）

しかし戦後、この能舞台はその場所を移ることになります。まず昭和二十六年（一九五一）には境内西北隅から参集所北側へと移転。そして昭和五十六年（一九八一）、豊中市服部南町に坐す住吉神社に移築され現在に至ります。優れた伝統技術を示す本能舞台は、平成十年には国の登録有形文化財に指定されました。

住吉神社ご参拝の折には、ぜひこうした経緯にも思いを馳せながらご覧になっていただければと思います。

（広報企画室　仲 真矢）

昭和15年「大阪天満宮全図」（部分）

豊中市住吉神社の能舞台（令和６年撮影）

社務所　電話番だより
よくあるお問い合わせ

現代の「神棚」事情

当宮によくある問い合わせの第一位は、厄年にあたる年齢について、第二位は「お札をまつりたいが神棚はどこに設ければいいのか」というご質問かと思います。

今回は、この第二位のご質問について考えてみましょう。電話でこの手のご質問をいただきましたときは、取り敢えず「南向きか、東向きの壁で、目線より高い所に」云々とお答えさせていただくのですが、これでご納得いただけることは少ないようです。

「うちで南向きといえば、窓の前に神棚を置くことになる」とか、「東向きといえば、うちはドアだよ」とか、「マンションなので壁に釘が打てないよ」とか、簡単ではないのです。

現代の住宅事情は少し前の時代とは大きく変わっていて、戸建て住宅でも和室を作らないことが多くなりましたし、賃貸マンションでは神棚を置く場所さえないとも聞きます。

ではどのようにすればいいのでしょう。まず神棚の大きさですが、従来のようなお社の形をして奥行きのあるものは、壁に設置するにしても収まりがよくありません。リビングの壁などであればなるべく薄型のものが適していますので、お社型ではなく、お札を立てる箱のようなデザインの物もあるようです。

お米やお酒、塩、水などをお供えする容器もそれにふさわしい形になっていますので、洋風のリビングにも違和感は少ないでしょう。少し調べるだけでたくさんのお札立てが見つかりますので、お家の雰囲気に合うものも見つかるかと思います。

次に設置する場所ですが、方角の事より先に考えるべきは、その部屋の奥の方、つまり上座に設置するべきかと思います。その方角が南向きか東向きであればなおいいのですが。ともあれ朝夕に拝みやすい位置であることが大切ではないでしょうか。

このように様々な条件が絡み合う問題ですので、電話だけでご相談にお応えするのは難しいのです。設置する部屋の窓、壁の状況、家具の配置など少し詳しくお尋ねすることもできますので、やはり神社へおいでいただき、神職に直接お話していただくのが一番かと思います。

毎日神さまに感謝できる環境が本当の豊かさにつながるよう願っております。

大阪天満宮献詠　風月社

令和六年四月～令和六年九月

四月兼題　遅日

丘の辺に少年ひとり佇めり
遅日の夕日じっと眺めて
乾　恵子

野の菊と若き乙女子美しく
遅日に映えていよよたのしめ
忠津　清治

五月兼題　葱坊主

初夏の風のてりあふ光みち
葱坊主らにわかき風たつ
佐野　秀子

床の間に活けられてあり葱坊主
父の手になり小花添へられ
家治　綾子

六月兼題　雨窓

菖蒲池雨に飛び交ふつばくらめ
窓よりながむ影はすばやく
坂井田　礼子

庭先のあぢさゐの花色増して
雨ふる窓に春惜しみつゝ
大北　滋保

七月兼題　葛餅

葛餅を二つ供へて父母に
識らせたきこと今ひとつあり
鈴木　敬子

前の日の過ぎたる口を詫ぶるため
葛餅を手に母を訪ふらん
南口　一二美

八月兼題　盆踊

白たびにねじり鉢巻手に団扇
男踊りの手足忙しく
大北　滋保

教へたる足の運びも軽やかに
盆踊りの輪にきみこちゃん見ゆ
北岡　由紀子

九月兼題　隣

引越して来られし隣はとんな方
気の会う人てあれと願ひて
伊藤　涼子

百歳の媼を友としかたらひつ
席を隣に卒寿の吾は
佐野　秀子

秋思祭　月

厳かに祝のたまへる薄明かり
宮の斎庭にのぼる月影
松村　暁二

その昔月の明かりに送られし
おもひでひとつ秘めて月満つ
鈴木　敬子

天満宮スカウト 活動日誌

◆ガールカウト大阪府第八十一団

今夏(令和六年)は四年ぶりに天神祭鉾流し神事に参列させていただきました。中学生スカウトが厳かな雰囲気の中で緊張しつつも立派に団を代表して玉串奉奠を行い、小学生スカウトも礼儀正しく参列できました。

部門毎では、小学生はキャンプを行い、カレー作りやキャンプファイヤー、自分達で考えた寸劇に取り組み、他団との交流を満喫しました。中高生は富士登山に挑戦しました（本頁下段参照）。これらの活動は大学生リーダーがサポート役として活躍しています。

◆ボーイスカウト大阪第九十八団

八月二十三日から二十五日まで、滋賀県高島市マキノ高原で、全隊合同の夏季宿泊行事を実施しました。森の中でキャンプをしながら、ボーイ隊は立ちカマドを作成したり、ハイキングをしたり、肝試しで小さな子達の脅かし役を工夫しました。カブ隊は天満宮の外で初めてのテントでの宿泊を体験しながら、ぶどう狩りや肝試しや琵琶湖での湖水浴を楽しみました。ビーバー隊は二日目から民宿に一泊二日で、湖水浴や虫取りなどの自然観察や高原の小川での水遊びをしました。

二日目の夜にはキャンプファイヤーを行いました。生憎のゲリラ豪雨に見舞われ途中中断となりましたが、キャンプの醍醐味は味わえました。

最終日の昼食はバーベキューを楽しみ、マキノの皆様に御礼の後、貴重な思い出を胸に無事帰宮しました。

大阪府神社スカウト協議会（大阪神S）

富士登拝

大阪府神社庁録事　髙木大明

大阪府神社スカウト協議会（寺井種治理事長）は、令和六年八月三日から四日までの一泊二日で、同会結成五十周年を記念した富士登拝をおこない、九十六人が参加した。

結成二十周年から十年ごとの周年の際に富士登拝をおこなっている同会。三日早朝に大阪をバスで出発し、静岡・富士宮市の富士山本宮浅間大社（小西英麿宮司）で正式参拝をおこなったのちに、「登頂組」と「宝永火口お鉢巡り組」の二班に分かれて登山を開始した。

「登頂組」の六十一人は午後二時に新五合目から登り始め、七時頃に八合目に到着。休憩ののち、翌四日午前一時に再び出発した。暗いなかを懸命に登り続け、四時過ぎに頂上に到着。四時五十分に御来光を拝んだ。

一方の「宝永火口お鉢巡り組」の三十五人は、午後一時五十分から山梨県南都留郡鳴沢村の鳴沢氷と同郡富士河口湖町の富岳風穴を見学。鳴沢村・富士緑の休暇村で休み、翌四日午前五時三十分に新五合目から宝永火口へと向かい、お鉢巡りをおこなった。

二班とも下山ののちには富士宮市の「富嶽温泉花の湯」で汗を流し、疲れを癒した。その後、バスで大阪へ。興奮冷めやらぬ様子の子供たちからは「しんどかったけどきれいだった」「がんばって登ってよかった」などの感想が聞かれた。

同会の南坊城光興副理事長は「富士登拝に参加したスカウト達が御来光を拝めて、よい記念行事になった」と語っている。

『大阪天満宮と天神祭』刊行

このたび『大阪天満宮と天神祭』が上梓されました。著者は当宮文化研究所の高島幸次所長、出版社は当宮「大阪書林御文庫講」の講員でもある創元社、その章構成は以下の通りです。

第一部　大阪天満宮と天神祭

第一章　大阪天満宮の創祀
第二章　大阪天満宮の発展と天神祭
第三章　「祭日」の再検証
第四章　江戸時代以降の大阪天満宮と天神祭

第二部　天神祭のおもてなし

第一章　〈マツリ〉とは何か？
第二章　おもてなしの仕掛け

第一部では当宮と天神祭の歴史を検証し、第二部では天神祭が盛大に賑わう原因を探っています。

「はしがき」には、同書の執筆動機が次のように記されています。

本書は、大阪天満宮の千年を越える歴史を振り返るとともに、天神祭を発展させた原動力がどこにあったのかを明らかにしようとしています。言い換えれば、オリンピックや万国博覧会のような一過性のイベントではない、伝統行事に潜む底力を掘り起こしたいのです。本書が解き明かす天神祭の魅力は、ひとり天神祭だけにとどまらず、全国各地における祭礼の賑わいを楽しむ視座を提供し、地域の活性化をはかる際のヒントにもなると考えています。

近年の生活様式の変化や少子高齢化により存続の危機に陥っている祭礼を存続させるヒントを提示しているのです。『神社新報』十月七日付の書評欄でも「本書は大阪天満宮及び天神祭の書籍でありながら、神社の護持運営と祭礼の継承全般に関はる大きな命題を内に祕めた一冊といへる」と紹介されました。

（六月十日刊、定価二二〇〇円）

天満天神研究会の報告

本誌前号（85号）でもお伝えしましたように令和九年（二〇二七）の「菅公御神退千百二十五年式年大祭」に向けて、天満天神研究会（略称、天天研）を再開しています。多様な専門分野の研究者が集い、それぞれの学術的立場から、天神信仰の諸相、とくに当宮の文化や歴史にかかわるこれまでの研究を踏まえて洗い直し、改めて成果公表をめざす取組みです。

この間、開催いたしました第三回、第四回研究会の概要を報告します。

（会場はいずれも文華館3階）

●第三回　天満天神研究会

日時：令和六年五月二十四日
題目：天神画像に分類における課題と〈毛利系〉（雲谷派系）天神画像について
報告者：松浦清（大阪工業大学教授）

報告者が当宮の天神画像紹介を本誌に二十年以上連載して来られた経験に基づき、現在一般に行われる「束帯天神」と「渡唐天神」の分類の問題点、ならびに像主を「天神」とするか「菅公」とするのかなどについての重要な指摘がなされました。また、防府天満宮にも伝わる特殊な図像である『三季天神』像については、報告者の架蔵にかかる画幅を実見しながら参加者全員で検討できる貴重な機会となりました。

●第四回　天満天神研究会

日時：令和六年九月二十一日
題目：天神信仰が謡曲創作に与えた影響―「休天神」を中心に―
報告者：永原順子（大阪大学准教授）

謡曲「休天神」は近年その存在が紹介された作品で、西山宗因が作者に擬されるなど当宮とのかかわりも予想されています。その内容や構造の分析を足掛かりに、従来知られる天神信仰を題材にした謡曲・能楽作品の主題や変容の様相を整理し直す試みが示されました。それをうけて、逆に、謡曲等の文芸作品が天神信仰自体に与えた影響についても示唆的な議論が展開されました。

第三回、第四回出席者（敬称略・順不同）は、松浦清、永原順子、竹居明男、北山円正、横山恵理、西山由理花、溝邊悠介、岩佐伸一、竹嶋康平、林潤平、長谷川貴信、佐藤優、町田大悟、南坊城光興、高島幸次、鈴木幸人

（文化研究所 鈴木幸人）

令和の御造替
千代崎行宮

神様が天神祭などの渡御（巡幸）の際に、仮に止まられる場所を「行宮（あんぐう）」あるいは「御旅所（おたびしょ）」と申します。

天神祭は、平安中期に始まり、年ごとに仮設の御旅所が設けられていましたが、江戸時代初めの明暦三年（一六五七）までに雑喉場（現・西区京町堀三丁目付近）に御旅所が常設されました。その後、寛文八年（一六六八）に戎島御旅所（現・西区川口一丁目付近）へ移転、さらに明治五年（一八七二）に松島（現・西区千代崎二丁目）へ移り、現在に至っています（「社報」35・55号参照）。

その社殿は、昭和二十年の大阪大空襲で焼失した後、昭和四十五年に本殿拝殿一棟型、社務所一棟の社殿となっていましたが、老朽化のため、このたびの「令和の御造替」となりました。

昨年十月二十九日に仮遷座祭を執行し、十一月から社殿の解体、地盤調査、地盤改良を経て、本年令和六年三月十七日に地鎮祭を、九月六日には上棟祭を斎行いたしました。

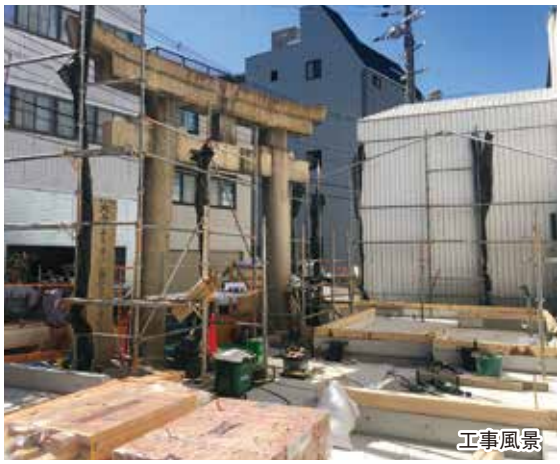
今後は石玉垣などの外構工事を含め十一月末に完工し、十二月初旬には新殿における遷座祭を予定しております。真新しい御殿で新年を迎えることになりますので、是非ご参拝下さい。

明治三十六年「大阪全図（部分）」
① 雑喉場御旅所
② 戎島（のち梅本）御旅所
③ 松島（のち千代崎）御旅所

地鎮祭

地鎮祭

上棟祭


工事風景

■ 当宮総代就任記念の御奉納

本殿　門帳　壱面
拝殿　門帳　壱面
総代　西端　勝樹様
総代　枚田　勘一郎様
令和六年六月二十四日

■ 設立六十周年記念の御奉納

拝殿南廂　吊灯籠　壱基
大阪天満ライオンズクラブ様
令和六年八月十七日

広報室だより②
季節限定
『梅型切り絵朱印』

近年、神社仏閣へご参詣される皆様に、御朱印の需要が高まっております。インバウンド観光が増えるに伴い、御朱印の流行は外国人参拝者にまで広がりを見せております。

数年前までの外国人参拝者は、社殿を見学し写真に収めて、それだけで日本文化を感じられていたように見受けられたのですが、近年は授与所で御守りを受けたり、御朱印帳に御朱印を収集されたりというように、少し関心の方向が変わってきたようです。

このような傾向を目の当たりにし、各地の神社仏閣では外国人にも喜ばれ、国内の参拝者にも魅力をお持ち頂けるよう、より斬新な授与品が考案されているようです。

当宮でも、令和六年四月から季節ごとに色味が変わる『切り絵朱印』の頒布を開始致しました。御祭神の菅原道真公に因んで梅型にし、それぞれの季節に合う季語を色泊で表現し、斬新且つ華やかな仕上がりとなっております。

こちらの切り絵朱印は現在、春・夏・秋の3種類を頒布しており今後も季節ごとに頒布を致します。御初穂料は千円でございます（春・夏・秋・冬・正月・梅季、全6種）。『梅型切り絵朱印』すべての色味をお集め頂き、大阪天満宮の四季を感じて頂ければ幸いです。

■ 人事任免 ■

令和六年一月二十五日付
当宮総代を委嘱。
西端　勝樹
枚田　勘一郎

■ 帰幽報告 ■

令和六年九月二十五日
講社連合会副会長
御羽車講 講元
田中　誠一（享年七十七）

大阪天満宮社報
てんまてんじん 第86号
令和6年10月20日印刷
令和6年10月25日発行
発行人　寺井種治
発行所　大阪天満宮社務所
〒530-0041 大阪市北区天神橋2－1－8
TEL 06-6353-0025
印刷所　木村印刷株式会社